

嘉永七寅年十一月四日よりの事

大地震大變の控

備中小田郡
笠岡村控

大津屋

安兵衛

西本町 大塚氏

備中倉敷陣屋詰め

御代官 佐々井半十郎様御支配

備中笠岡陣屋詰め

手附御列 喜多村儀八郎様

平手代 井ノ上亀三郎様

御出張之時

嘉永七年寅十一月四日

笠岡市中近國近村大地震の控え

地震入り初め。嘉永七年六月十五日夜 地震ゆり、其の時上方筋伊勢地(路)は大地震にて人家数多崩れ損亡多く御座候。

其節は笠岡にては心配これなき事。同年十一月四日朝四ツ時に当所地震ゆり皆々大心配仕り候。一同家出し吉人も我が家に入るものなし。夫よりおさまり、其の夜四ツ時又は九ツ時に少々ゆり、翌日の五日七ツ半申の下刻より大地震と相成り、笠岡は申すに及ばず近辺大変な地震に御座候。

其の時の笠岡(村) 丈儀は書き写し置き申し候。

当村称念寺橋より東は真入川迄の間大ゆりに御座候。北は殿川町、千市町、瀬戸町(瀬戸の町)此の筋は大損事にて、札場筋より川辺屋町、公事場筋損亡これ無く、又は風呂屋町、八軒屋町損亡なし。

崩落の死人は殿川(町)にて五、六人死去仕り候。翌日掘りだし、御検使(視)受く。其の時の寺院損事は勘(観)照院、吉祥院、南昌院、西明院、夫より智光寺、玄忠寺、壽正院此の寺院は皆閉意(塀)、又は、墓所迄損事、又は、町家崩損の事候ふ家无(無)し。

御検分村役人へ願ひ出し市中付け留め相成り、大崩れ大損事少しの家数六百四、五拾軒、帳面に其の時の庄屋助四郎殿年寄光右衛門殿宿老小十郎一同検分附け留めに相成り申す。外町は大ゆり丈の事ゆえ損事これ無し。

濱湊筋の損亡は一文字筋中ばと(波止)二筋われ、西はと新はと壱尺五寸より三尺迄十二筋程われ、新田橋落ち、その方(他)段々地われより砂だべ(泥)ふきだし、陣屋道にて砂だべふき上げ免(珍)ずらしき事大変也。其の夜五ツ時又々大地震に相成り申し候。皆々我が家にをるもの吉人もなく、濱べ船山川へ逃げ出し、右殿川三原屋金助と申す者の家崩れ候下より出火と相成り候得共吉人も行く者なし、早がね(鐘)つ(撞)き立て候ても参り候者無く、火元へ凡そ拾人斗り出合ひ、かわらにてなげ(投)てけ(消)し候処、其の夜十五、六度ゆり申し候事、其の夜の露は雪の如くふり、我が家へ吉人の帰るもの無く、夫より地震小家(屋)相立ち翌六日七日迄小家に出申す。

其より七日に皆々我が家に帰り候処、又々五ツ時頃地鳴り致し地震ゆり来り皆々大井に心配致し其の俣逃げ

て行く、夫より十三日迄小家又はわらぶき(藁葺)の家へ借受け家出仕り候。十三日我が家へ帰り候処村役人戎屋小十郎殿助四郎殿光右衛門殿両三人附け留めに相成り申、其より地震も大ゆりこれなき事。

地震ゆり数、四日朝壹度夜二度、五日大ゆり壹度夜十五、六度程ゆり、六日三度夜二度、七日二度夜三度、八日同断、九日、十日同断、十一日壹度夜二度、十二日なし夜壹度、十三日、十四日、十五日なし夜三度、十六日昼少し風、雪もふり夜大雨大風に相成り近年に無く大雪大風にてふり壹尺五寸斗りつむ、其の夜風にては唯一人も裏表へ出るもなし、やね、おだれ、たるき迄雪ふり地震四、五度ゆり、地鳴りは度々致し候得共逃げ場所これ無きに付、皆々大井に心配仕り候。

十七日二、三度夜三度、十八日一、二度夜同断、十九日なし、二十日二、三度夜同断、二十一日なし、二十二日朝壹度夜二度、二十三日二度夜三度、二十四日なし、朝五ツ時頃戎屋小十郎殿内の大釜鳴り候事を皆皆心配仕り一同逃げ出し津なみ(浪)におそ(怖)れ候得共其の難なくのがれ、翌日二十五日朝より地鳴り度々致し候ゆへ戸障子にひびく事大いに心配仕り、又々津なみ事を申し聞け町内皆々逃げ出し、西は天神社内北は八幡社内(東は)東八幡社内其他宮地又は川端山辺へ逃げ去り、其の後は近く(き)神鳴り(雷)と相成り候上は最早心配之儀これ無き哉に存じられ候。

是より皆々我が家へ帰り申し候事。二十六日二度夜同断、二十七日なし、二十八日一度、晦日朝五ツ時頃余程の地震ゆり皆々我が家を逃げ出し、朔日少しゆり、二日なし、三日夜少しゆり、四日なし、五日夜二、三度、六日夜二度、七日なし、八日九日同断、十日朝中の町は四ツ時頃ゆり其の辺逃げ出し外は家出仕り申さず、其の夜ゆり殿川町に(て)も皆々逃げ出し、十一日なし、十二日夜二度、十三日一度夜に三、四度外町七、八度ゆり西町、風呂屋町、八軒屋町、川辺屋町ゆり申さず。十四日夜前の通り十一月四日朝の如くに御座候。是より朝迄二度ゆり中の町、殿川町筋は皆々逃げ出し、十五日我が家へ帰り、十六日なし、十七日夜一度、十八日一度夜二度、十九日二十日なし、二十一日少しゆり、二十二日夜三度、二十三日夜少し四、五度、二十四日二十五日なし、二十七日二度、二十八日二十九日なし、大晦日朝五ツ時頃余程のゆりに御座候皆々心配仕り候。

翌年安政二年と相成り申し候。元日一度夜二度、元日朝日輪の光り月夜の如くなり、二日二、三度夜少し十二度程ゆり大ゆりは二度、三日二度夜二、三度、四五日は又々大風、少し地震もゆり、是恵より大ゆりこれ無く候、外には同年八月迄はゆり其の間の事は写し申さず。

九月八日夜二、三度ゆり一度は大ゆりに御座候。

九月十二日日輪の入る時にびいど路の如く光明もこれ無く、又其の夜月の色合は月しよくの如くなりおぼるの月に相成り申し候皆大井に心配仕り候。

九月二十三日少しゆり、二十五日夜ゆり、二十六日なし、二十七日夜少しゆり其の後は段々ゆり候得共少しの事は写し申さず。

余り大變のこと故後の子々孫々に至る迄この事書き写し置き候間皆々此の考へに御座候。此の辺にても何れ地震ゆる事かくの如くに御座候。寅年より卯辰巳迄少々ゆり申し候事。

此の時諸國津波大地震ゆり、大坂、播州、伊豫、土佐、阿波、讃岐、藝州、三備宿、伊勢地、東海道筋、中國筋残り無く余り大變のこと故書き置き申し候。跡々為筋ためすじに相成り居り申す事。

此の時大地震に付き笠岡村一同逃げ出し、諸商内致す者老人も居り申さざるに付、米小売り商人これなきに付小前一同難渋いたし、西本町分米借出し浜にて立うすにて津(搗)き小前のものへ売出し候事。大黒屋元助

殿拾俵、嶋屋富次郎拾俵両家にて借出し世話人浜方にて仲世(仕)頭元助、喜助外に幸助、町筋にて大津屋安兵衛并二幸助、徳藏、政平、榮吉、西新五郎、伊助、中金、十一人世話方にて米小売より又た下げ売遣わし、

三俵下人岡のもの(物)頭に取替、売場所は浜の中世(仲仕)瀬七と申す者の店かり売払い、残り七俵は元助運び今立屋政助へ売払、代金元助運び残り同人嶋富へ払い申さざる様子に承はり其の俵に相成り申す可き事

其の時少し小前借の残り候帳面これ有るに付、其の時帳面焼き払い申す可く候事
西町橋西浜方丈売遣はし候。

嘉永七年十一月五日より十三日迄 笠岡村の内

嘉永七年寅大地震、翌年安政二(年)と替り、去年より大豊作にて米壺升に付き四、五匁成り、操(繰)綿備後福山綿にて百拾匁斗りに相成り候事。

安政二年卯十月二日戌の下刻より三日迄大地震にて、江戸中屋敷方、町家、御丸の内出火に相成り候、人死に多く数相しれ申さず、江戸近辺近國にも同様、御上様にも御大明(名)方にも大心配に相成り申し候。

笠岡にても三日夜よりゆり申し候六日申の刻にゆり、安政三年辰正月七日夜八ッ時一度、八日朝六ッ時式度少々ゆり申し候。同年二月十一日夜に地鳴り致し、是より神鳴(雷)に相成り候ゆへ皆皆案(安)心仕り候。

同年八月二十四日江戸御浜御殿日本橋外色々二十四日四ツ時より大雨大霰両丸八寸斗り 霰にてかわら一々吹ちらせ、跡大津波にて引かへし、人死多く(数)相しれ申さず、大變のこと写し置く。
尤も大地震は先年笠岡にて御座候こともこれ有り、嘉永七年より跡(昔)に百二十年斗り古来にこれ有り、浜かわ(側)地われ致し候ことも古帳面しらべ致し申す可く、地震跡等は大豊作とゆふ事なり。

江戸大地震の時御大明(名)方幡(旗)本衆御屋敷方町人家敷崩れ候
死人数しれ申さざる事

安政二年卯十月二日亥ノ刻より出火に相成り申し候事

御丸之内

小川町

酒井雅楽頭様

松平紀伊守様

森川出羽守様

松平駿河守様

西御丸下

松平豊後守様

松平肥後守様

堀田備中守様

松平下総守様

内藤駿河守様

内藤紀伊守様

戸田行部郎様

松平玄蕃頭様

伊藤若狭守様

大名小路

小笠原佐渡守様

松平因幡守様

亀井淡路守様

遠藤但馬守様

伊藤修理太夫様

本田中務太夫様

柳沢監物様

永井遠江守様

薩弐式部少輔様

林大学頭様

琉球人装束屋敷

外桜田

琉球人装束屋敷

新吉原にて死人二千余人
江戸市中にて地震死人数
二十余万人と申すこと
出火口三十八ヶ所
是より八方へ廣がる。

松平大膳太夫様

柳原式部少輔様

松平肥前守様

小川丁

朽木近江守様

火消屋敷

潰家、消失

町家二十五万余

大損し土蔵

二万二千余

火入 同

五千五百

寺社大損し

百五十八ヶ所

同 焼失

七十二ヶ所

御家人方屋敷潰

五千余

同 焼失

千二百余

御籠(旗)本屋敷大損し 八十二ヶ所

同 焼失

二十八ヶ所

御死人男女合壹万二千三百八十人 破損所数しれず 怪我人数知れず

嘉永七寅年より九ヶ年跡に信州濃野(信濃)善光寺大地震に御座候処、善光寺開帳年にて人数多く死人御座候
処其の時地われより水を吹き出し家藏共皆崩れ落ち申し候事、其の時は濃野(信濃)善光寺斗御座候

地震のゆる時は日輪は雪中にても正月元旦の様に相成り申し候。

色合は日天にうるおい(潤)あり少しかすみ(霞)もこれ有り、又は塩(汐)のみちひ(満干)はくるいわ(あり)、
その事能く考へ有る可きこと、津浪くる時は多く塩みちひすくなき事有り、それ、よく考へ成さる可く候。
皆々此の時大井に心配致し、地震のゆり数をしるべし、

安政五年二月二十五日夜地震ゆり申し候、其の時大坂藏札場より 出火に相成り申し候、二十五日昼八ツ半
より出火に相成り、長町四丁目迄焼け、嶋之内渡し煙り申し候事、凡そ家数三万五千軒程に御座候大火、二
十五日夜九ツ時より七ツ時迄当所にてても式度程ゆり申し候、大坂大地震に御座候 出火中へ右大地震となる
倉敷御代官田中庄次郎様支配笠岡陣屋詰め 辻壮一郎様

安藤作次郎様 出張

此時下筋はゆり申し候 上方筋は格別にこれ無く候事

安政五年極月二日夜六ツ時頃地震ゆり、それより同五ツ時頃より地震二度程ゆり、それより夜の間十三、四度ゆり申し候 皆々心配致し申し候 皆々逃げ出し身重の分は 家内にをり家内子供は皆々出外の家々に入る。此の間少々の地震はゆり申し候得共書き写す儀はこれ無き分
一日少しゆり四日夜式三度ゆり、六日夜少々ゆり、其より少しゆり候儀はこれ有り候儀はこれ有り候得共十二日七ツ時頃ゆり申し候。

御代官田中庄次郎様 安政六未七月十二日死亡相成り候に附忌中にて盆をどりなし。

八月朔日祭禮も一同祭り日延に相成申し候八月朔日九月六日より七日迄十三日祭り中の所九月九日より十日迄十五日祭り、九月十一日より十二日迄、西本町(以下略)

笠岡市西本町商家大塚家の文書を、郷土史家岩山氏が手書き文書化したものを活字化したものです。